

「森田のことばを頼りに」

神経質の悩みからの立ち直りの過程で、神経質症の悩みと実生活の困難とに翻弄されながら、何とか「森田」にしがみついて離れず、やっとの思いで嵐を乗り切り、「森田」を指針とする生活が徐々にできつつあると自分でも評価できる時期がありました。

自分の悩みは、複雑で特別に困難だと意識はなかなか抜けず、執拗極まりない強迫観念の悩み。しかし、一方では疑いつつも素直に従うことの大切さを「森田」で学び、それが実感できるようにもなりつつありました。その頃の心の内側を、「森田」への思いとともに、綴ったことがありました。「私の好きな森田のことば」として生活の発見会の機関誌「生活の発見」一九八七年七月号に掲載されました。

私の好きな森田のことば（「生活の発見」誌1987年7月号掲載）

『人並みに働くという外証が、迫々とごまかしてはなく実際に当たるようになれば、自然に心の信念が成熟してくるのであります。親鸞が法然の教えに従って、「自分はただ良き人の仰せに従って、念仏申すまでの事である」といわれたように、この入院の諸君は、ただ森田の導くがままに、素直に実行していれば、ただそれだけでよいのであります。

（森田全集第五巻 五六一頁）

とらわれの最中、悩み悩んで高良興生院の門をたたき、嫌疑恐怖の苦悩を打ちあけたとき、「それはつらかったでしょうね」と、あたたかく慰めてくださった丸山晋先生のことばに、思わず涙が頬を伝わったことを、今も鮮明に思い出します。「いつになったらこの苦しみから脱け出すことができるでしょうか」と書いたある日の日記に対して、「碎啄同時」ということばを引用しながら、ひなが卵からかえるときと同じように、外からも内からも機が熟してきた時点で、古い殻を破ることができると、それまでは頭で理解したことに従って行動してゆきなさいと教えられました。

あれから十四年、当初は針の筵のように辛く感じられた会社生活で挫けそうになりながらも、日常生活を堅持してこられたのは、良き人の仰せに従う幸せに恵まれたからだと思います。疑い深い私、長年の信仰でも救われなかった私が、真の自己実現への方向を見出すことができました。したのは、森田を貫いている愛と知の偉大さに、知らず知らず打たれたからだと思います。

強迫観念の出口のないような苦悩と、現実の複雑さに、「私の悩みは特別だ。この先、一体どうなるのだろう」と、大きな不安に襲われることが、たびたびありました。しかし、森田の確かさが、灯台の灯のように、風雨の中でも私を導いてくれました。押し寄せてくる気分と、現実の苦しさ、沈み、流されそうになりながら、今だけは一生懸命に仕事をしようと必死でした。毎月、集談会に出席するようになってからは、毎月、方向をただし、外から形を整えることができるようになってきたと思います。グチを言い、疑いつつも、先輩のことばに従わざるを得なかった現実の苦しさ、苦しくも従わざるを得なかった森田の知と愛の偉大さが、いつか心の内側をも変えていてくれました。

あれほど、不安や苦悩を排斥していた私が、それらを辛いながらも現実の一部として受け入れることも、いつかできるようになっていました。たとえ不安があっても、森田と生活の発見会がある限り、私は大丈夫という期待が、年を追うごとに確信のようにもなってきました。

しかし、欲望が強いだけ、深い悩みも伴うことは、今後覚悟しないといけないでしょう。これからも森田のことばを頼りに、自分らしい人生を、そしてできることなら少しでも人に喜んでもらえるような生き方を、送ってゆきたいものだと思います。